京都 KYOTO

不思議ふしぎ!?

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

お能の心・鏡板の秘密

六月の初め、平安神宮では「京都薪能」という野外能が行われます。篝火が焚かれ夜空を焦がす炎に心が昂まります。ところで、この篝火、多くの方が漠然と観能のための照明と思っておられるかも知れません。それは大きく違います。この篝火は舞台を照らすためのものではなく、神様の降臨のためのものなのです。演能の本来の目的は神々への奉納。観客に対して行われるようになった現在でも能楽師は献能の心を決して忘れません。そ

薪能　篝火と能役者　於・平安神宮

れを伝えるのが、松が描かれた能舞台の「鏡板」です。

描かれているのは「影向之松」。かつて春日の神が降臨され「萬歳楽」を舞ったとされる松で、能はすべてこの神々への献上という形で行われるのです。なぜ鏡板というのかといえば、この松が実物であれば、演能者は松に降臨される神様に背を向けて演じることになります。しかしこの板に向かって演能すれば、今度は観客に

能舞台　鏡板の松の絵　本来老松が描かれる。

お尻を向けることになります。そこで実際の松は演能者の正面（つまり観客側）にあり、後ろの板は鏡であり、その鏡に映った松ということなのです。

須く舞台というものは神仏に対して献じられるためのもの。有名な清水寺の舞台も本尊の十一面観音に捧げられるため観客席はありません。神仏に捧げるという敬虔な心こそ能楽の本意。かつて日本人は「能」と言わず、必ず「お能」と言いました。こういう心こそ忘れてはならないですね。

なお、今回に限ったことではありませんが、こうした情報は現在、入力するだけで何の苦労もなく瞬時に得る事ができます。かつて私たちは知りたい解に到達するのに相応の時間と労力、さらに解を導く方法への理解が必要でした。そして何よりも解を見付けた喜びがありました。今、それが省かれた反面、忘れるのも早く、何より身に付きません。こうした時代に大切なことは実際にその場で見る、ということです。鏡板の由来も、影向の松も知識としては簡単に手に入ります。しかし体験でしか得られないことにこそ、その本質があることを知って下さい。五百年かけてつくられてきたものは、五百回足を運んで見ることでしかわからないものなのですから。

（京都・清遊の会　堤 勇二）

影向之松　春日大社参道一の鳥居脇にある。
初代の松は枯れて切られ、右側に二代目が育つ。

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。
京都を知ることは日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都検定®
京都・観光文化検定試験
京都商工会議所